

# 訪中団日記

佐藤悦成

このたび、禅研究所参禅会主催による、天童寺友好訪中団が結成された。訪中の目的は、天童寺への拝登とともに、道元禅師に關係する諸寺を踏査し、併せて仏教関係遺跡を訪ねて、現代中国の仏教事情を知ることにあつた。

七月二十五日～八月二日迄の九日間の日程で、上海—杭州—天台山国清寺—寧波—太白山天童寺—杭州—蘇州—上海、という行程が組まれ、概ね当初の予定に従つて日程を消化することができた。それは、いわゆる四人組以後の政策変更に伴なったところの宽容な態度をみせていて、しかし、精神面での充実は望んでいないようであり、そればかりか信仰の自然消滅を願つているようにも思われる。今回訪れたいすれの寺院においても、伽藍などは現代風ではあるが一応の修復が完了、もしくは進行中であつた。しかし、伽藍の復興に伴う精神的活気といったものは感じられなかつた。国清寺監院老師の、現代の若い人達は、仏教の何たるかを教えられないし、また、興味もないのを知らうともしない、という言葉に、中国における仏教の将来を見る思いがした。それは、現在行われている修復事業についても“人民の血と汗と涙の結果”である、という絞切り型の解説が加えられる時代が、将来来ないとは断言できない、という思いに連なつてゆく。

また、現在のところ宗教に対して国家は、歴史的文化的遺産の保護という対応を示しており、文化大革命中に破壊された寺院の

訪中団日記（佐藤）

訪中団日記（佐藤）

総てが杞憂に終ればよいのであるが……。以下に記すのは、個人的に記した事柄を行程順に綴つたものである。

但し、通訳諸氏の説明、又は各寺院における歓談の内容などに、今日、各種資料から得られる内容と若干の相違を含む部分（例えば僧衆の人数）もあるが、何ら手を加えることなく、そのまま記した。無用な誤解を避けるために、このことを最初に記しておく必要がある。

七月二五日（土）晴 名古屋——大阪

14：30 名古屋駅西口集合。

三〇分後、バスにて出発。名神高速道路を経て、約三時間後、大阪国際空港近くのホテルAPに到着。

18：30 結団式。

竹田学長（団長）、田島所長（副団長）より挨拶。団長以下総勢

三二名である。

引き続き会食に移る。

七月二六日（日）晴 大阪——上海

7：00 起床。

三〇分後に朝食を取り、その約一時間後に宿舎を出発。

9：45 大阪国際空港到着後、ゲートNo.11に集合。

10：50 JAL 793 便（成田発大阪経由上海行き）DOUGLAS

DC-8, JA 8046 機）に搭乗。

一〇分後に離陸。雲も少なく、概ね良好な天候状態に恵まれ、上空から見る東シナ海の群青色が印象的である。

12：10（現地時間） 上海虹桥空港着陸。

日本との時差が約一時間あるので、飛行時間は二時間半程ということになる。尚、これ以後は總て現地時間で表す。  
空港は穀倉地帯の真中に在り、かなり広い面積を持っている。  
BOEING 727 など四、五機（国内路線を飛ぶ中国民航機）が駐機している。外気温は35°Cとのことで、大阪と余り変わらない。  
空港ロビーを抜け、マイクロバスにて上海駅へ向かう。バスのプロントガラスには、外国人専用バスを表わすステッカーが貼付されている。この表示が、信号交差点での通過を容易にさせる役目を果して、いることを後になって知る。

12：40 空港出発、上海駅へ向かう。

出発に際して、中国国際旅行社上海分社の随行員、章惠菁女史が同乗する。章女史の説明から上海市の概略を記せば、この市は中国本土の東部華東地区海岸線のほぼ中央、長江の河口に位置している。華東地区は、上海の他に山東・江蘇・安徽・浙江・江西・福建・台湾の七省を含んでいる。その中で上海市は、江西と安徽の二省を除く他の五省と接しており、一〇区、一〇県に分かれている。西晋の頃は“滻瀆”と呼ばれ、今日でも短かく“滻”と呼ばれることがある。市の街並は、基本的には宋代に造られ、一七

世紀までの間に海港として広くその名を知られるようになった。しかし、その後、列強の侵略に遭い搾取され続けたが、一九四九年五月に解放され、人民の手に戻った、ということになる。

章女史は、上海駅において我々一行の案内を杭州分社の陳杏奎氏に引継ぐといい、そして、全行程に随行するには陳氏であり、更に、各訪問地で、必要に応じて随行員が加わる仕組みとなつている、と説明した。

西郊公園の傍を抜け、虹橋路を駅に向かう。路の両側には楠とプラタナスの並木が続き、葉の緑が目に快い。大部分の家屋は、素焼煉瓦を積み上げ、その上に石灰を塗った構造である。

延安路を経て市街地に入る。交差点には交通信号が設けられておりが、その總てが直前で青信号に変わる。このからくりは、各交差点脇に立つ檣上の警察官結所にあつた。外国人専用の表示がある車輪が差掛ると、信号動作を手動に切換えて通すのである。

この切換えは、後の各訪問地總てで為されたが、他の交通との秩序を考えれば、行き過ぎの觀もある。しかし、交通の絶対量が少なく、大部分が自転車と歩行者であることから、現在のところ支障はないのである。その歩行者も自転車も、日本とは比較にならぬほど強かである。車輪の警笛は煩い程に鳴らし続けられるが、彼等はゆっくり進行方向を確認して、接触直前に上手く躱るのである。これは、双方とも突然に極端な動作をしないことが事故を起こさない鉄則のようだ。

街中の雜踏を搔分けて、二〇分程で上海工業展覽館に着く。ここで小休止。この建物の前身は中ソ友好ホールであったが、両国関係冷却後、上海で製造される重・軽工業品が、約一万平方メートルのフロアに展示されているという。我々が參觀したのは、その一部で催されていた上海市工芸品展覽会である。

14：00 上海工芸展覽館出発。

延安路を経て西藏路に入り、暫くして人民廣場（旧競馬場）前を通過し、吳淞江（蘇州河）を渡り、天目路に入るとすぐに上海駅である。

展覽館近くの道路で葬儀の列を見かけた。平服（白の開襟シャツが多い）に黒い腕章を付けた人々が、手に手に花を持って、故人の遺影を飾ったオート三輪の後に続いている。当然のことではあるが、僧侶の姿はない。しかし、社會主義國といえどもやはり葬送儀礼そのものを無視はできないようである。

14・15 上海駅到着。

杭州分社の陳氏が上海駅入口で迎えてくれる。上海駅は、中国最大の工・商業都市である上海市のほぼ中央に位置し、約一、一二三二万人の重要な輸送拠点である。この駅を発着する客車は一日に各方面に三二対、通過列車は両方向から二対という。中国は、駅の数およそ四、七〇〇箇所、鐵道營業路線の全長約五〇、〇〇〇キロという、世界有数の鐵道國であり、線路は日本の新幹線と同様の廣軌である。列車は全区間共通塗色の、深い緑色にアイボリ

訪中団日記（佐藤）

一の二本ストライプ。そして、側面には行先を記した車輪ブレートが掛けられ、乗降口横には軟・硬車の区別が記される。外国人及び高額の乗車券を買える人々は軟車（一等車）、そうでなければ硬車（普通車）である。

これより、滬杭線と称される路線で上海から南へ下り、その路線の終点である杭州まで行くのである。これを北へ取れば、京滬線と称される路線で蘇州、南京を経て北京まで行くことができるのである。上海は京滬・滬杭両線の中継点といえる。杭州より南は、杭長線（杭州から杭長線を北上すれば牛頭山まで行く）、浙贛線等を経由して鉄路は昆明まで続いている。丁度、我々の乗る列車も終点は昆明であり、およそ六〇時間走り続けるという。杭州までは約三時間で着く。軟車乗客待合室にて発車時刻まで暫く待つ。

14 .. 47 上海駅13番線より杭州へ出発。

プラットホームは、列車乗降口付近まで高くなっている日本等と同じ方式である。列車は軟臥車で、コンパートメント型式の東独製車輛である。部屋には二段ベッドが一対あり、四人が寝られる。

沿線では、三毛作のうち第二作目の刈り入れが始まており、生産組織単位と思われる集団により収穫が行われている。車窓から見た限り、作業の大部分を人間の労働力に依存しており、機械化が進むにはいま少し時間が必要なようだ。脱穀した後の藁は製

紙の原料として使用されるという。

列車の冷房装置が故障したこともあって、暑くて長い三時間であった。

17 .. 47 杭州駅到着。

ここで、随行員として寧波支社の奚鳳仙女史が加わる。マイクロバスで宿舎の西冷賓館へ向かう。雜踏の中を警笛で威嚇しながら清泰路を経て、西湖東岸の湖浜路を北に取り、保俶路と交わる所で左折、環湖北路を、右に保俶塔、左に西湖と白堤を見ながら、約三〇分で到着する。

18 .. 15 西冷賓館到着。

この宿舎は西湖の北西岸に位置し、西隣には杭州飯店が在る。そして、西冷橋、西冷印社、中山公園、また『四庫全書』を収蔵した文瀾閣、岳墳にも近い。また、暫く歩けば蘇堤の北端に出ることもできる風光明媚な丘の上にある。

宿舎への進入路脇には解放軍兵士が着剣して立哨しており、前庭には五星红旗を付けた「红旗」が一台と、護衛の側車付き「長江」が二台駐車してある。この施設の使用状況や位置付けがよくわかる光景であった。欧米からの旅行者も数組宿泊している。

19 .. 15 夕食。

七月二七日（月）曇、一時俄雨 杭州——國清寺

6 .. 00 起床。三〇分後に朝食。

7 .. 00 宿舎出発。天台山國清寺へ向かう。

マイクロバス二台と荷物運搬車一台のコンボイで出発。杭州より天台山国清寺へは約二五〇粍の道程とのこと。途中一度だけ小休止を予定している。

西湖の西岸を南に進み、環湖西路から杭富公路経由で浙江省第一の大河錢塘江に架かる錢塘江大鉄橋を渡る。この大河は、流路に曲折が多く、そこから浙江の名がついたといわれる。また、河口付近が三角形となっていることから、満潮時に海水が逆流して海嘯（高潮）が押し寄せ、その高さ三米に達するという。特に旧暦八月の大潮には多くの見物人が集まることである。この激しい高潮は、呉王夫差の家臣で、讒言にあって殺され、屍をこの江に投げ込まれた伍子胥の怒りによる、という伝説もある。また、陳氏は、この大鉄橋は中国人技師が自力で設計・施工した最初の大型鉄橋（二層橋で、上を人・車、下を鉄道が通る）として歴史に残るもの、と自慢し、南京と武漢には揚子江を跨ぐ大鉄橋があるが、それ等は戦後の架橋であり、対する錢塘江の橋は戦前の架橋で、この経験が、後の二鉄橋を架ける基礎になつたことを語つた。橋は重要な施設であるため、警備兵の詰所が設けられ、自動小銃を肩に談笑する解放軍兵士の姿を見ることができる。

二時間半程で紹興の町に入り、左手に浙東運河と、そこを行き交う船の群れ眺めつつ、蕭甬線紹興駅前を通過し、運河を利用しての貨物輸送の管理を行ない、物資の集積所ともなつてゐる紹興輪船碼頭を対岸に見るうちに、この古い水の都を抜ける。

紹興は杭州の東南に位置し、夏王朝の始祖禹王ゆかりの地であり、春秋時代には越の都でもあつた。後漢代には蔡邕が住んだ（柯亭）ことでも知られ、また、魯迅（周樹人）の故郷でもある。城内には魯迅の学んだ三味書屋も残されているという。

#### 10・20 嶼県工芸竹編廠にて小休止。

曹娥江を渡る直前を右折する。河岸道路沿いの村落に、中国でも有名な竹細工工場がある。ここでは実用品とともに装飾品も多く作られ、工場内の展示場には精巧な細工を施された作品が展示されている。外国人旅行者の主要休憩所となつてゐるらしく、前庭には売店もある。ここで初めて中国式廁所を経験することになった団員も多かつた筈である。

曹娥江は、東陽県の齊公嶺にその源を発し、北流して杭州湾に注いでいる全長二〇〇粍余の小河川である。上流は剡溪と称され、嵊県より紹興県に流入して曹娥江の名がある。元来は錢塘江の一支部であったが、河口付近が塞がれて単独の河になつたようである。また、陳氏は、この河には孝行娘の伝説があると語つたが、それは『後漢書』に記される父の曹旰と、娘の曹娥のことであろう。水死した父の遺体が見つからぬを悲しみ、自ら河に入つて生命と引き換えに父の遺体を捜したといつて曹娥の話を聞いた度尚は、弟子の邴鄆淳に命じて曹娥のため碑を作らせたが、後に蔡邕がその碑文を読み、「黃絹幼婦、外孫齋白」（蔡邕の謎掛け、黃絹は絶、幼婦は妙、外孫は好、齋白は辞の意）の八字を題した

訪中団日記（佐藤）

という。

11・10 竹編廠出發。

輔装された道路の両側には稻が干され、車輛の通過できる範囲は極めて狭くなっている。対向車がある場合など、やむなく稻の上を走ることも屢々であったが、農民はそれを嫌う様子もない。稻の作柄は余り良いとはいはず、品種改良を含む農業技術の立ち遅れを示している。しかし日本の場合を考えれば、技術は進歩していくも食料自給率は低く、米国に大きく依存しているのが現状であるから、何ども複雑な心境になる。

國清寺へ近付くにつれ、道幅は狭くなり林道といった雰囲気になる。過去においては、この辺りも寺域であったのだろう。大きく天台山（主峰の華頂山は天台県県城の北東に位置する）といえば、南は仙霞嶺に連なり、北は舟山列島に面して、先の曹娥江、並びに甬江、靈江の分水嶺となっている広大な地域を指すのである。奚女史の説明によれば、万年寺は、國清寺の北方約四〇糠、智者大師真身塔院も、北へ約一〇糠離れているとのことである。

13・10 天台山國清寺到着。

杭州より車で約六時間の行程であった。少々乗り疲れを感じる。この國清寺は海拔一、二〇〇米、浙江省天台県県城の北約二糠の山中に位置している。

塔、更にその奥、丘の上に六角九層甕塔が見えてくる。寒拾亭を抜けると豊干橋（寒山、拾得と交際のあつた豊干に因む）が現われる。顯廣知客老師は侍者二人を伴ってそこまで出迎えて下さった。到着の挨拶の後、取敢ず遅い昼食を済ませることになる。伽藍配置からゆくと、方丈楼の右上に当る食堂に向かう。聞けば、宿舎となる建物（迎塔樓の扁額が掲られている）、及び食堂は国の施設であり、國清寺の管轄下にはないという。伽藍の一部を国が接收して、訪問者の宿泊に供し、また、生産大隊の駐屯地にも使用しているのである。このような状態では、國清寺として僧侶の管理下に置かれているのは、法堂など主要堂宇以外には余り広くはあるまい。參觀を許されなかつた部屋は、その多くが農民の住居となっているようである。

食事など宿泊中の世話をしてくれる人達は、總て天台國清紹待所の服務員ということであったが、實際には生産大隊と付近の村の人であり、訪問客があると服務員として働くのだという。

昼食後、説法台にて歓迎会が催され、國清寺を代表して可明監院老師から歓迎の詞があり、また、団を代表して田島副團長が挨拶を行つた。

〔可明師の挨拶〕

今日、愛知学院大學友好訪中団が當寺を來訪されましたことを熱烈に歓迎いたします。當寺と日本の関係は、皆様ご存知のとおり、昔より親密な交流があり、最澄法師はその代表的な方であります。

ます。皆様の曹洞宗と天台宗は同じ種類でありまして、中日友好条約以後、交流が一層深まりました。隋の開皇一八年に当寺が建立され、その後、唐代に最澄法師が来られまして、以後、天台山と比叡山との間には友好関係が続いております。そして、宋代には日本僧の多くがここに学びました。

中日両国は、今後とも永く友好を保つてゆかねばならないと思ひます。

#### 「田島副団長の挨拶」

このたび、私共愛知学院大学では友好訪中団を結成いたしました、かねてより希望いたしておりました当寺拝登を実現させました。現実にこの地へ立ちまして、団員一同感激に堪えません。可明老師のお言葉にもございましたが、日本と当寺の関係は、伝教大師以後絶えることなく続いてまいりました。特に、私共の日本曹洞宗の開祖であります道元禅師も、伝教大師の開かれました比叡山で学び、その後中国を訪れ、天童山の如淨禅師のもとで大事を了じられました。その際、道元禅師も当寺を訪問されておりました。宗祖の跡形の訪問が達成されたことを慶びますとともに、今後とも日中の交流が強くなりりますことを祈念いたしましてご挨拶に代えさせていただきます。

(この後、訪中団からの記念品を贈呈し、可明師と歓談する。その内容を質疑応答の形式で次に記す)

——僧侶としての日課はどうになっているのか。

勤行は朝課と晩課を行う。朝課は、今季節は午前三時より行い、晩課は午後三時より行う。

——僧侶は全員が出席するのか。

出席できる者のみでよい。

——信者の随喜はあるのか。

毎日ではないが、ある。

——その他の時間はどのように過すのか。

朝課の後は、經典の講義を行う。また、個人的に經典の暗誦、読誦をしたりする。そして、寺の管理をし、労働に参加する。

——労働とは、人民公社の人々と一緒に行うということか。

僧侶は寺内の労働のみで、寺外へは出ない。

——僧衆の人数と、年齢が知りたい。

現在、当寺の僧侶は七一名いる。一七歳から七五歳までの者が修行している。文化大革命以前には約九〇名の僧侶が居た。

——國清寺には大藏經など古い資料は残されているのか。  
蔵經楼に明藏の写本を有している。華嚴經は僧侶の舌の血で書かれたものだ。明代の宏覺法師が書いたものだ。

——明藏は何時頃の写本か。

乾隆帝の時代のものだ。

——布教活動はどのように行っているのか。

寺外での布教は行わない。信者からの依頼があれば經典を読む。

——行持軌範などはあるのか。

現在はそのようなものはない。

——他の寺院との交流は行われているのか。  
往来はあるが、行政区画内でのことである。

——信者は多数いるのか。

多くはない。若い人達は仏教の何たるかを教えられないし、興味がないから知ろうとする人も少なくなつた。今、寺に来る信者は老人が多い。

——それは儒、道教なども同じだろうか。

よくわからないが、信者は仏教が多いと思う。

——四月八日の清明節には墓参を行い、また、命日に墓参する人もいると聞いたが、その時、寺院へ参拝する人はいるのか。  
それは行われない。自分の家族のみで行う。

自分で行う人はいる。寺院全体の日課には入っていない。

——僧侶にはどのような役職があるのか。  
例えれば、方丈、監院、首座、知客などがある。

——本尊の釈尊像は何時頃のものか。

明代の作で、約四〇〇年前のものだ。金銅製で一三噸程の重量である。脇仏は、阿難、迦葉両尊者である。その他の仏像も多くは明代のものである。

歓談の印象としては、予め用意した如き返答が多く、本当のところは不明な部分もあるが、それはそれで仕方があるまい。歓談終了後の雑談の中で、「法師のお年は?」の問いに、老師は、「私は法師ではない。法師は方丈にのみ用いる言葉だ。方丈の唯覚法師は五八歳。一九七八年に訪日している。私は五三歳、首座の靜恵師は六五歳、知客の顯広師は五一歳である」と答えられた。

この後、顯広知客老師の案内で諸堂を参観する。各堂の屋根には、龍、獅子、宝珠など彩色の施された飾りが乗せられている。

(これは、天童寺、阿育王寺などにも必ず用いられた)。大雄宝殿には大きな釈尊座像ほか、十八羅漢(隨行の陳氏は、十六羅漢に玄奘と慶友が加わる、と説明したが、一般には、慶友と賓頭盧か、または、迦葉と軍徒鉢歎が加わる説が知られている)などが安置してある。妙法堂では僧侶一〇人程と婦人の信者三人が晩課を勤めていた。藏経楼では明蔵の一部を閲覧したが、写本、版本入り混つておらず、かなりの部分が散逸していたものを、ごく最近補充したのではないかと思われた。宝物殿、觀音殿、弥勒殿を経て「雙潤栄流」の篇額がある門を入れると庭園となり、清代乾隆帝の書になる碑(乾隆元年四月初八日の日付が入る)が立つ。また、明代董其昌の書になる碑も残されている。庭は魚樂園と称し、直径三〇米程の放生池が中心にある。山門を出て隋塔を見学。この甕塔は、隋の煬帝が天台大師を偲んで建てたものである。

という。

参観終了後、暫くの間自由行動となる。先程の「雙潤栄流」の意味は、国清寺を東西から挿み入るように流れ、豊干橋の西側で合流している二本の川を指すのである。本来は放生池にも川の水は通じていたのであろう。雨花殿の東には斎堂があり、雲板と極彩色の柳が下がれていた。しかし、生産大隊の管理下に在るらしく、石畳の中庭には糸が一面に干され、軒下には農器具が並べられていた。勿論入ることはできない。

18..30 夕食。

宿泊施設は、国清寺とは無関係というだけあって精進料理ではない。

食後、女性服務員二人に、仏教をどのように思うか、と質問したが、二人とも、よく知らない。興味がないから知らうと思わない、と答え、監院老師の言葉を裏付けた。これが仏教に対する若い人々の平均的見方なのであろう。

七月二八日（火）晴、一時俄雨 国清寺——天童寺

6..30 起床。三〇分後に朝食。

7..30 国清寺出発。

豊干橋前の広場にて、顯広知客老師の見送りを受け、寧波市へ向かう。

9..15~9..40 路上にて小休止。

寧波へ向かう途中、奚女史と個人的に話を交す機会があつたの

で、その内容を次に記す。

——随行員の勤務体系はどのようになつてゐるのか。  
午前は七時三〇分~一二時迄、午後は一四時~一七時三〇分迄となつてゐる。

——団体に随行すれば、当然その時間帯を守ることはできないと思うが。

私達のような特殊な条件にある公務員は、訪問客への奉仕を第一にしなければならない。

——敢えていうなれば国民総てが公務員といえるのであらうが、他の職種にある人々はどうなのか。

工場労働者などには残業手当などが適用され、その他労働に応じて賃金の別に手当がつく。

——昨日、国清寺でも監院老師に伺つたのだが、墓参など祖先供養を行うのか。

四月五日の清明節に行うし、命日に行う人もいる。それについては、休暇を申請してゆけば誰も咎めることはない。  
——食料、衣料などの購入はどのような仕組みになつてているのか。

主食の米は、月単位で配給され、月に大人は一五匁、子供は年齢にもよるが、就学年齢に達していれば大人の半分が支給される。衣料は切符制をとつており、小売店へ行って自分の好きな商品と交換することになる。

その他、母親として、子供の教育について今一番心配しているということ。仕事の都合上、家を空けることが多いので、家に居る時は必ず勉強を見てやること。また、配偶者は練瓦工場へ勤めているが、夏休み中の今は、家に帰つて子供と一緒に昼食を取り、再び工場に行くことなどの話を聞いた。

まだ、収入については、一般に六〇元前後（一元＝約一三〇

円、ちなみに“上海”クラスの自動車は約二、五〇〇元、自転車は一五〇元程度の価格と聞いた）が標準給与だそうであるが、平均的労働者はもつと低賃金（陳氏は五〇元前後という）となろう。

更に、農村では、自留地を徐々に増やす政策が進められており、人民公社から離れて農業を営む人が今後多くなるだろうことを語り、それは生産意欲の向上に繋がり、国にも耕作者自身にも良い結果を齎すであろうことを語った。つまり、年間の生産目標など一定量以上の収穫を上げた場合、上回った生産品は個人の所有となり、自由市場へ出して現金収入を得る道を認めていたいことである。

組以後の、ある意味では自由な雰囲気の中で希望に溢れている、

という印象を受けた。

また、各寺院でも、随行員諸氏も、屢々いわゆる四人組について言及する場合があつたが、反省し、批判すべき過去の行為は全て四人組に起因するとして、断罪してしまいうのが殆どであった。

その口調に何かはじめないものを感じたのは、旅行者の無責任な印象であろうか。

この間、丘陵地帯を通過する度に、雜木に囲まれた墳墓とおぼしき土饅頭や、石碑（新旧、形状は様々）を見掛ける。しかし、最近下草を払つた形跡はなく、やはり墓参が頻繁に行われている様子はない。

#### 10・55 寧波市内、寧波華僑飯店到着。

昼食後、一時間程自由行動となる。この飯店は一九六三年に建てられ、中国国際旅行社寧波支社はここに置かれている。すぐ裏手には月湖があり、長征路を南へ下れば蕭甬線の終点である寧波駅へ出られる。クリーク沿いに走る道路脇は柳の並木で飾られ、水面に映る緑が美しい。

#### 13・45 華僑飯店出発。

ここで、寧波支社から随行員として陳炳良氏が加わり、寧波の人口は約四二万人、一六平方糸の市内面積があることなど、一通りの説明を受ける。月湖から紅衛路を経て甬江（鄞江と姚江が合流して甬江となる）を渡り、紅衛東路に入つて七塔寺へ向かう。

#### 14・00 七塔寺到着。

玉佛閣にて、住持月西法師（六六歳、浙江省佛教協会副会長、寧波佛教協会々長）から歓迎の詞があり、また、団を代表して竹田団長が訪問の挨拶を行つた。

〔月西法師の挨拶〕

日本の愛知学院大学訪中団の皆様が、七塔寺においてになつたことを熱烈に歓迎いたします。

当七塔寺は、唐の大中一二年（八五八年）に建立され、一、一〇〇年余の歴史を持つております。唐代には東津禪寺と称し、棲津禪林、小補陀寺とも称されました。文化大革命以前に長老は一〇〇人以上居りました。伽藍は五、部屋数は六〇〇余ありました。しかし、四人組の破壊により、仏像の総てを壊されました。

その後、党の宗教政策により修理を開始しております。本殿の本尊は觀世音菩薩で、普陀山の觀音を移安したものです。僧侶は現在六〇名余り居りまして、毎日、朝・晩課を行うなど、修行に励んでおります。当寺は臨濟宗ですが、天童寺とも関係があり、心鏡禪師の開基であります。その舍利は当寺にお祀りしております。また、清代の大藏經を収蔵しており、仏殿には五百羅漢などがござります。

今後とも、中日の佛教徒はより一層交流を深め、話し合つて行かねばならないと思っております。

〔竹田團長の挨拶〕

私共は、天童山の如淨禪師に学んだ道元禪師を宗祖とする、日本曹洞宗の宗立学校である、愛知学院大学の教職員で構成した訪中団であります。突然の訪問にもかかわらず歓迎していただき感謝に堪えません。

今伺えば、様々な政治目的のために貴重な伽藍、仏像が破壊さ

れたことは非常に残念なことであります。しかし、現在は修復が進みつつあることを伺いまして、私共としましても慶びに堪えません。修復が一日も早く円成することを願っております。

（この後、訪中団からの記念品を贈呈し、月西法師と歓談する。その内容を質疑応答の形式で次に記す）

——大変大規模な修復が進行中のようだが、その資金はどこから出しているのか。

党と信者の双方から出ている。

——現在の伽藍は何時の時代に建てられたものか。  
過去に幾度も火災などに遇つたが、現在の伽藍は、清の光緒帝の時代である。

——寺名にある七塔の由来について伺いたい。

民間の信仰の場であったことに寺の起源があり、この七塔寺に誰かを祀るといった意味はない。

——現在、禅宗としての活動をしているのか。

現在は禅堂がないため、各人が個別に坐禅などの修行に励んでいる。

——佛教協会の下にはいくつの寺院があるのか。

現在、五ヶ寺が協会に属している。全てが禅宗である。

——天童寺、阿育王寺もその中に入っているのか。

この中には入っていない。それは行政区画が違うからである。しかし、交流はある。

歓談終了後、伽藍内部を参観する。寺の入口に「寧波仏教協会」と並んで「寧波製盒廠」と記されていることが、この寺の現状をよく表わしている。

大雄宝殿（臨時）においては、僧侶一〇名程と七人の信者で法要が営まれている。仏殿（非常に傷みが激しく、大棟は崩れ、屋根は瓦がずれて波を打っている）では、仏像などの内部修理が進められており、数人の若者と、中年の指導者が協力して彫刻に励んでいる。文化財の保護・修理に役立つ伝統工芸の職人を養成する目的も含んでいるのであろう。

伽藍のうち、仏殿・大雄宝殿・玉仏閣以外は、何らかの形で陶器の工場、倉庫などの生産活動に使用されており、ここでも信仰の場は極度に狭くなっている。方丈殿も倉庫となっていたが、整頓はされており、心鏡藏奥の舍利塔は参観できる。塔の正面には「唐勅賜心鏡禪師真身舍利塔」、右に「大清光緒丙午」、左に「住持慈運重修」とある。

14・35 七塔寺出発。阿育王寺へ向かう。

寧波市内から鄞県東の阿育王寺へは、約二五糠、三〇分程といふことである。曙光路を北上して寧穿公路に入り東へ向かう。この辺りはクリークが縦横に走り、船舶を利用しての物資流通が盛んに行われている。ヨンクリート製の運搬船が往来する河辺には多くの家屋が建ち並び、洗濯をする女性の姿も見える。

水田の間を抜け、クリークを渡る道路はよく整備されており、

幾つかの石橋を越えて山中へ向かう。

15・05 阿育王寺到着。

山門前には国内の旅行者数人の姿があり、物売りさえもいる。観光化の波は確実に押し寄せつあることを窺わせた。

山門を潜り参道を進むと、左手に放生池、右手に鐘楼、池の正面に天王殿、そしてその奥の大雄宝殿と経て、舍利殿に着く。この舍利塔には釈尊の頭骨の一部が収められているという。塔の一部が碍子張りになつておらず、内部を見る事ができる。この舍利塔は、四人組時代には僧侶が隠し持つて山中に逃げ、身を挺して破壊から守つたという。阿育王寺は全体の八分通り（大雄宝殿の内部と仏像は修理中）修復が済んでいて、伽藍全体は綺麗に仕上られたが、大棟の宝珠は輝いている。伽藍内部の丸柱は総て赤く塗られているのだが、床に赤ペシキの跡が点々と着いているのは艶消しだ。

六角七層の育王下塔（甕築）の修理は完了していたが、現代風にされてしまい、綺麗に仕上したこととの引換えに、重要な何かを見失つたとしか思えない。苔むした国清寺の隋塔が、見る者に安心感を与える、周囲の景色に溶け込んでいたことと比較して、一層その感を強くした。文化財の修復とは、単に色を塗り換える、造り直すことではない筈である。

阿育王寺全体に費された修復費用は約五〇万元に及ぶという。国民の平均的賃金からすれば、失業対策的意味を差引いて考えて

も、かなりの金額といえる。

また、破壊の原因となつた為政者の狂氣は容易に消し切れるものではないらしく、当時のスローガンが礎石に薄く残っている。蔵経楼へ向かう階段横には石碑が並べ置かれていたが、これ等は表面に塗られていたコンクリートを剥して修理したものといい、この他の多くは碎かれたり、表面を削り取られたという。

#### 15・45 阿育王寺出発。天童寺へ向かう。

天童寺は寧波市より東へ約三五糠に位置しており、阿育王寺からは南東に一〇糠程の距離である。途中、太白山の一支峰である小白嶺を越えるが、その頂上には五仏鎮麟塔が建ち、天童寺参拝の人々を麟から守つたという心鏡藏喫の伝説が伝わる。麟を毒饅頭で退治し、屍体を焼いて残った灰の上に塔を建て、五仏を安置したことに起源があるという。

#### 16・00 五仏塔到着。

八角七層の甄塔で、内部には階段が設えてあり塔上に昇ること

が可能。その展望は素晴らしい。この地は宏智と大慧が相見した揖讓亭跡といふ。但し、現在の塔は民国九年（一九二〇）の重建である。老夫婦が塔脇の住居に住んでおり、暫くすると老人は数個の石を見せてくる。伝説にいう心鏡が麟退治に用いた毒饅頭のある。

二〇分程の後、五仏塔を出発。小白嶺を下りきると水田が左右

に広がっている。

長い参道の両側には幼木、古木入り混つた松の並木と竹林が続き、第一山門（伏虎亭）を経て、第二、第三の山門を抜けると、左手雜木林下が外万工池跡（内万工池に比して手を入れた形跡はない）と説明を受けた。紹熙四年（一一九三）虚庵懷敞の重建を手助けするため、榮西が日本から木材を送ったという千仏閣はその奥に（内・外万工池の中間ということか）に在つたという。暫く進むと一挙に視界が開け、内万工池と「東南仏国」と大書された牆壁が現われた。その背後には伽藍の甍が雄大に重なり合っている。

#### 16・20 天童寺到着。

「万國帰宗」と書かれている牆壁の裏側に車は止まり、永通副寺老師の出迎えを受ける。

御書楼にて歓迎会が催され、天童寺を代表して永通師から歓迎の詞があり、続いて竹田團長が拝登の挨拶を行つた。

#### 〔永通師の挨拶〕

このたび、愛知学院大学天童寺友好訪中団の皆様が、我が天童寺へ参拝に来られましたことを、天童寺を代表して歓迎いたします。現在の天童寺伽藍は明代に建立されたもので、過去に三度の火災、一回の水害に遇つております。七〇〇年程前、天童寺において道元法師は如淨法師に就いて習つたことがあります。日本の曹洞宗と、我国の曹洞宗は全く一緒です。しかし、残念ながら火

訪中団日記（佐藤）

災と水害などのために、道元法師についての物はなにも残っておりません。近年、四人組の破壊によって大きな被害を受けましたが、その後、国家が修復を行いました。昨年、道元法師の開かれた日本の曹洞宗が、この天童寺に記念碑を建てられました。中日両国の佛教徒は永久に、正々堂々と交流を深めてゆきたいと願っています。

〔竹田団長の挨拶〕

私共は曹洞宗の宗立学校として、その伝統は一〇五年になります。日中國交正常化以来、予て望んでおりました天童寺拝登をここに達成することが出来まして、大変嬉しく思っております。私は今年で数え年八一歳になりますが、一度こちらに伺つて参拝せねばならない、そういう気持でまいりました。道元禅師はこの地で如淨禪師にお目にかかり、そのお教えによりお悟りを開かれました。その天童山に今こうして訪れることができたことを思うと、感激あらたなるものがあります。

（この後、訪中団からの記念品を贈呈し、永通師と歓談する。その内容を質疑応答の形式で次に記す）

——現在、天童寺に僧侶は何名いるのか。

僧侶は約五〇名いる。年齢は、一九歳から八五歳までの間である。ちなみに、住持の広修法師は六一歳、私は六五歳である。——広修法師で住持は何代目になるのか。一六七代になる。

——如淨禪師は何代目にあたるのか。  
——今すぐにはわからない。  
——歴代住持の名前、年代などはわかるか。  
——総てわかる。しかし、文書としては残っていない。現在、歴住の位牌を彫っている。  
——嗣書などは残っているのか。  
——こちらでは伽藍法のみである。

——それでは一人前の僧侶となつた証明はどうに行うのか。  
——証明書はないが、頭に線香で二二(横に三を四列)の印をつける。  
——一二とは何の数か。

沙弥、菩薩、比丘戒の意味である。

——信者の数はどれくらいいるのか。

四人組以後、徐々に増えつつあるが、正確な人数はわからない。過去には八〇万の信者がいた。

——天台山では、行持軌範に類するものは現在はない、ということであつたが、天童寺はどうか。

——過去にはあつたといふことか。

——過去にはあつた。  
——今はここにもない。

——天童寺に古い資料、又は大藏經などは残っているのか。  
——清代の大藏經が残っている。その他はなにも残っていない。八〇〇余あった仏像も四人組時代に総て壊され、今の仏像は総て新

しく作ったものだ。

——毎日の修行はどのように行っているのか。

朝・晩課、および坐禪が主で、個人的に經典を読んだり、暗誦したりする。また、寺内での労働も行う。

——布教活動は行っているのか。

信者に依頼されればお經を読み、寺内での布教は行う。

——例えば清規などについてであるが、何を守って生活しているのか。

百丈清規である。また小乘戒を守る。

——道元禪師の時代と、今伽藍の建っている場所は同じか。

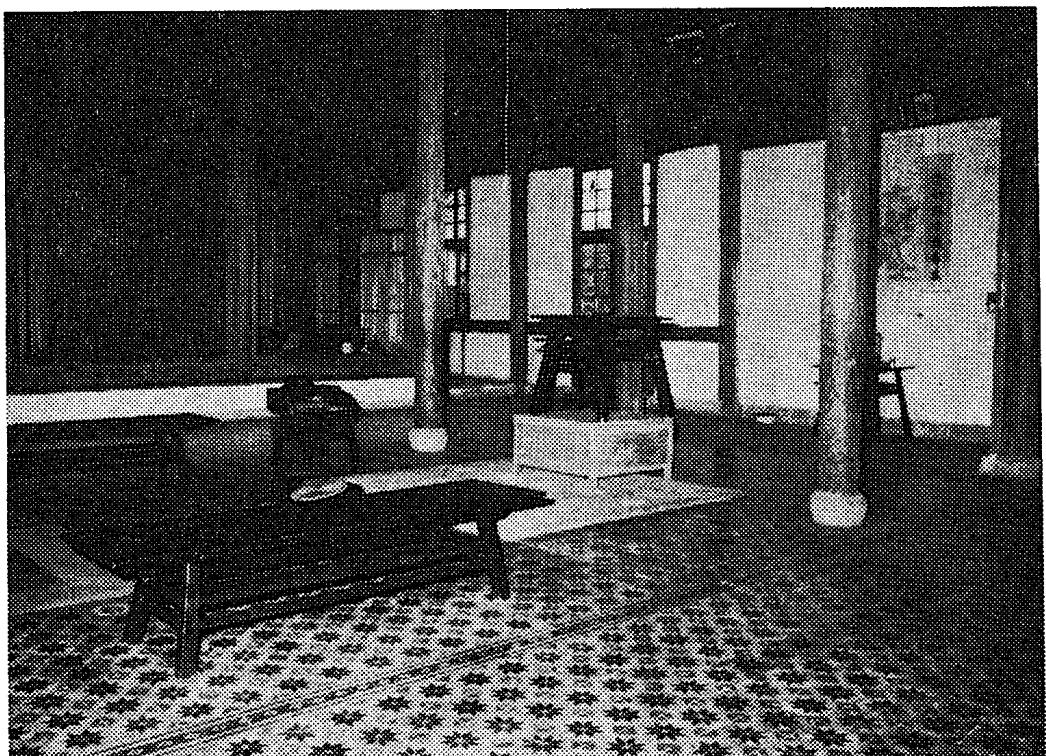
道元法師の時代とは伽藍の位置が違う。池の前（内万工池のことか？）辺りにあったと思う。過去の伽藍は部屋数が九九〇室あり、非常に大規模なものだったということだ。

——現在居る僧衆は全て曹洞宗の人なのか。

こちらでは特別に宗派意識はない。臨濟宗の人も居る。

歎談終了後、諸堂を参観する。主要伽藍の修復は九分通り終つたようで、到着時、内万工池周辺で作業していた人々の他は、境内で作業中の人を見かけることはない。

諸堂を結ぶ廻廊は石造りであるが、その雰囲気は永平寺に似ている。大雄宝殿（仏殿）前の泰山木一対を眺めながら、その東側にある雲水堂に入れれば「道元禪師得法靈跡碑」が建立されてい



天童寺東禪堂内部

る。天王殿の布袋、韋馱天、大雄宝殿の釈迦、弥陀、薬師、及び迦葉、阿難など総ての仏像は真新しく、金色に輝いている。また、法堂には須弥壇に代り、住持説法の場が設けられている。その裏手、先覚堂横の台地に立てば全山を見渡すことができる。南に向かって、法堂・仏殿・天玉殿の大屋根が続き、その東側には御書楼の屋根越しに鐘楼が突き出ている。この位置に立つと、三方を山に囲まれ、南にのみ開けていることがよくわかる。法堂に大棟がないのを少々奇異に感じる。

東禅堂内部の両側には板間が設えてあり、単のように思えるが、中央の石畳には聖僧が安置されず、奥の壁に如来図が掛けられているのみである。坐禅の作法を問うが、曖昧な返答しかない。しかし、要するに面壁ではなく対座の坐禅であり、同時に念佛を修するのである。当初予想していた如く、禪淨双修であり、明代以後の淨土的特徴を持つ黄檗の禪と思えばよからう。堂内壁面に「念佛時間」として差定が掲げられていたことを後に知ったが、現在の天童寺に道元禪師入宋当時の姿を求めるることは、伽藍についても、仏法そのものについてもやはり無理なことである。

東禪堂に対する西禪堂は、配置として対を成しておらず、法堂前庭の西側（御書楼と対を成す位置）に在る。しかし、内部には何もない。

國清寺においても同様であったが、參觀できなかつた建物には、農民らしき家族が幾世帯も住んでおり、文革中、天童寺がいかない。

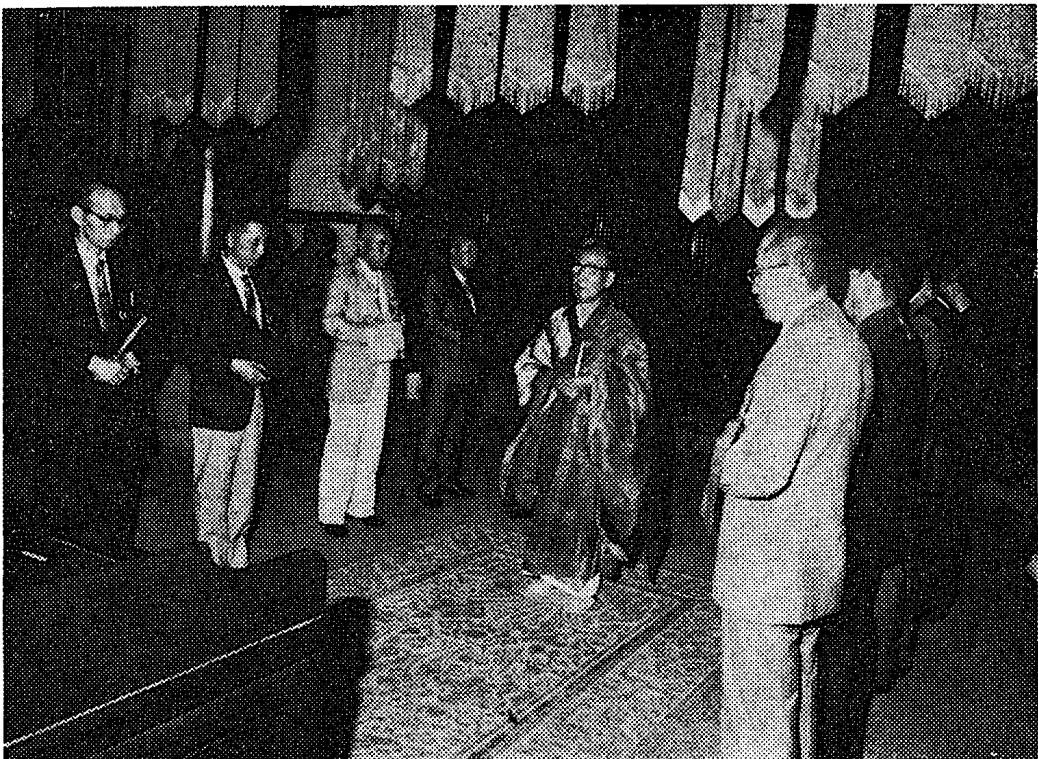
る扱いを受けたか、その詳細は知らないが、その後の処理は未だ完全に終っていないようである。それは、現在も淨慈寺に解放軍が駐屯しているように。

天童寺の現在の部屋数は七〇〇余室で、伽藍の総面積は二五、〇〇〇平方米を越えると聞いた。過去に比して三〇〇弱の部屋数が減少したとはい、その維持、管理の苦労は並大抵のことではあるまい。

政治的要素の介在する維持、管理の問題について、如淨禪師は如何なる対応を為したのであらうか。表面的にはその宗風と嗜み合わぬ面、つまり住持としての政治的手腕が大いに要求されたと思うのだが。

ところで、太白とは金星のことで、明けの明星、宵の明星として最も大きく、明るく光るこの星は『天童寺志』に記される建立伝説に登場するのみではなく、例えば『宋史本紀』の嘉定年間には「太白、昼見ゆ」「太白、天を経す」などと二二回記録されている。その他の記述にも「流星あり、大なること太白のごとし」などと見え、馴染みの深い星だったようである。『西遊記』にも玉皇大帝の側近として太白金星季辰庚が登場している。

この太白山も、天台山と同様に一つの山ではなく、天童寺の後方が太白峰、その左手に玲瓏峰、古天童の裏手が乳峰、五仏塔の建つ小白嶺など、俗に三百峰といわれる山系を総称して太白山と呼ぶのだそうである。



天童寺仏殿にて報恩諷経を厳修

18..30 夕食。  
マッシュルーム・湯葉を主体とした、油で調理した精進料理である。手を換え、品を変え湯葉が出てくるのには驚いたが、味付けは多彩で飽きさせず、調理人の腕が超一流であることを知らしめた。

七月二九日（水）晴 天童寺——寧波——紹興——杭州  
2..30 起床。

竹田団長は既に威儀を正しておられる。三〇分後、御書楼一階を出発し、仏殿へ向かう。

3..15 ~ 4..30 天童寺側朝課に全員随喜。

天童寺僧衆三七名と居士二名が東序に五列、西序に二列となって位置に着いている。僧侶は木蘭色の袈裟を掛け、居士は黒の俗服である。僧衆の中に、灰色の法衣のみで袈裟を掛けない沙弥が九名居る。

約一時間『楞嚴呪』を立誦し、その後、遶行を行う。十八羅漢の前では女性信者が一人、線香を供え、土間に額づいて何事がを一心に祈っている。仏殿入口には、寺内に住むと思われる一〇人程が集まり、珍らしそうに覗き込んでいる。

4..30 ~ 5..00 訪中団による報恩諷経。

導師竹田団長、両班に田島副団長以下が並び、感激と緊張の中で報恩諷経が厳修された。（導師竹田団長の法語は、団員の横井弘道氏が「天童寺雑感」に記されているので重複して記さない）

終了後、仏殿前にて記念撮影。見上げた空は白々と明け始めており、澄んだ空氣の中で次第に天童寺が全貌を現わし始めてきて、この静寂の中に身を置いて、万感胸に迫るものがある。

5・20 古天童へ赴く。

内万工池の東端を抜けて山道を暫く登る。左手には孟宗竹の林が続き、右手は浅い谷間となって、西瓜畑、水田などが広がっている。位置としては、天童寺東側の山裾を回り込んだ高台に当る。小径を歩くこと約二〇分で古天童入口に到着する。両側は鬱蒼たる竹林で、あたかも厚い屏を巡らせた如くである。その中を潜る小径には、それ迄の道とは異り、瓦が埋め込んである。竹林を抜けると前が開けて畠地が現われ、その右手奥に「淵默雷声」と刻まれた碑が立つ。既に台座、及び「声」の文字下半分が地に隠れている。随行の陳炳良氏によれば、文革以前には小屋（小庵？）が在り、住む人もあつたというが、今はその跡形もない。

6・20 天童寺へ戻る。

すぐに朝食となる。食後、御書楼において、天童寺より各団員に氏名入りの書幅が贈られたが、これは団員の松本善隆氏の尽力によつて適えられた記念の品である。

7・45 天童寺出発。寧波市へ。

往路をそのまま戻り、甬江東岸を走る躍進北路に出で南に下る。

轍橋を経て延安路を北へとり、姚江を渡つて人民路へ入り、寧波港へ着いた。さすがに港周辺は活気に満ち、様々な店が軒を

連ねており、人でごつた返している。

8・30 寧波港到着。

桟橋に出れば、丁度、上海碼頭（埠頭）には「工农兵18」（工农兵は、労働者、農民、兵士の三者を意味する）が接舷したばかりで、乗客の下船が始まっている。上海から寧波まで約一時間の船旅（列車による所要時間の約二倍）であるという。乗客の総ては国内旅行者であり、全国各地への旅行は誰でも自由に行うことができる、と説明されたが、殊更そのように説明されると、その裏側を勘織りたくなるではないか。少し離れて温州碼頭があり、そちらにも船が着いている。また、港内には戎克などが往来、停泊しており、紹興平野東端に位置する唐、宋以来の貿易港であることを示している。勿論、現在も浙江省東部の水陸交通の要衝として、物資の集散地となつて栄えており、「小上海」とも称されている。日本では、最澄、榮西、道元禅師をはじめとして、多くの僧侶がこの港を経由したことで名高い。

暫く桟橋に佇み、道元禅師の到着時のこと等に思いを巡らす。

8・50 寧波港客運站内の友誼商店に向かう。

この地は、骨の象嵌と、木彫りに長い歴史を有し、優れた工芸品を産出するため、商店にもその種類の品物が多い。二〇分程で友誼商店を出発。

寧波市的主要路、東方紅大街に面し、ほぼ市の中間にこの骨董

品店は位置している。様々な種類の品物が時代を明示されて並べられている。大半が清代同治年間以降の品物で、特別な珍品は無いが、中国歴代年表に西暦が併記されたカードを置いており、他の友説商店とは趣が違う。店の周辺（寧波市を中心部）を少し見て回るなどして、三〇分後に出発。

10：00 范氏天一閣到着。

東方紅大街を西進し、共青路を南に折れて、前日通過した月湖に出る。そのまま南へ進めば華僑飯店に行くのだが、その手前で西に折れて天一閣に着いた。

明代嘉靖四六年（一五六一）に范欽が建設に着手し、その五年後には完成をみた、中国における保存状態の完全な最古の蔵書楼である。正門には「南國書城」の扁額が掲げられている。この建物は外観上の特徴として、書籍収蔵庫（二階建て）にうだつが二重にも上がっていることである。民家のうだつを屢々見ることもあつたが、それらとは比較にならぬ程華麗な装飾を施したものが高く突き出ている。また、棟の中央には、池に蓮が浮かぶ図案の飾りが上げられ、水に縁起を担いでいることを窺わせる。

我々は横手に回り、「明州碑林」の文字が記された入口から内に入る。常緑樹が多く樹えられるとともに、太湖石を周辺に配した池が造られており、景観と防火に配慮されている。

蔵書数約三〇万巻を誇り、宋・元・明・清に渡る歴代の写本・刊本が収蔵され、特に明代の地方誌、登科録などに貴重本が多く

い。解放時には一三、〇〇〇冊程しか残されていなかつたが、現在は散逸した書籍も順調に回収されているとのことである。また、文革時における破壊の危機に際しては、当時の故周恩来首相が自ら保護の命令を出したといわれる。一階が陳列室、二階が書庫となつてゐるが、現在も漏電火災を恐れて電気配線はなく、また海上に近いこともあり、湿気を防ぐため、窓には細工が施されている。

陳列室の一部には「天童寺、阿育王寺の記念品の展示即売場」と日本文で記してあり、『天童寺誌』などの他に、画家の凌近仁氏の作品を即売している。傍では凌氏本人が製作に勤んでおられる。

約一時間の参観の後、天一閣を出発して華僑飯店に向かう。

10：50 寧波華僑飯店到着。

昼食の後、一時間程自由行動となる。飯店周辺を散歩する人、少し足を伸ばして月湖畔辺りを散策する人、飯店内で疲労を癒す人など、銘々が与えられた時間を有効に過している。

13：00 華僑飯店出発。杭州へ向かう。

出発に際し、寧波支社の陳炳良氏と別れる。

途中、紹興の街で小休止の予定である。この区間で、団員の鈴木哲雄氏により中国禪宗史の講義が為された。

16：00 紹興飯店にて小休止。

街全体に何故か活気が感じられないが、その理由については飯店での陳氏の説明で納得がゆく。紹興酒（老酒の異名がある。良

訪中國日記（佐藤）

好な状態で保存すれば、数年寝かせた酒の方が美味しい。中国八大名酒の二の生産は冬から春の間に限られ、腐り易い夏・秋には生産活動を休止することである。年間に三万噸生産し、近年では国外にも多く輸出されているらしい。

ところで、紹興飯店には国際旅行社紹興支社が置かれていることから、外国人専用とみてよいであろう。この建物は、以前は寺院であつたらしく、大棟には獅子と宝珠が残され、間取り、付近の建物の造作などにも伽藍としての面影が残っている。

三〇分の休憩で杭州へ向かって出発する。

18・15 杭州飯店到着。

杭州飯店（旧鳳林寺）。一九五四年に杭州飯店となる。唐代に鳥窠道林と白楽天が「七仏通誠偈」について問答を交したという伝説の故地（いう）は、七月二六日に宿泊した西冷賓館の東隣に位置する。正面の西湖畔には外国人専用遊覧船乗り場が見える。ここで二泊の予定である。杭州は、紹興二年（一一三二）、高宗により臨時首都「行在」となされてより、百数十年に渡り南宋の都臨安として栄えた歴史を有し、また、一三世紀にはマルコ・ポーロもこの地を訪れており、「東方見聞録」にその名を見出すことができる。

19・00 夕食。

七月三〇日（木）晴 杭州

6:40 起床。四〇分後に朝食。

7:50 宿舎出発。西湖へ。

湖北路を挟んで、飯店向側の船着場から西湖遊覧に出る。名称の由来は至極単純で、街の西方に在るからに過ぎない。それ故、同名の湖は中国各地に存在すると聞く。しかし、南宋の都が置かれた地であることと、湖の美しさから、西湖といえば杭州を指すに至つたらしい。

船には米国人旅行者数人と同乗となる。中山公園、岳飛廟の在る孤山島から、白堤を見ながら湖上を東へ進み、保俶塔を正面に見る辺りで南へ舵を取る。左手に柳浪聞鶯を見ながら、湖心亭、阮公墩の東を抜け、小瀛洲の北側船着場へ着く。この洲には大きな池があり、面積の半ば以上を水面で占められている。九曲橋、開網亭などを楽しみながら、洲の南側に在る三潭印月へ向かう。西湖の水深は極めて浅く、二米前後（船のスクリューで湖泥が巻き上がる）であり、深い淵である筈の三潭印月（この名は、蘇東坡が三基の石灯籠を深潭に据えたことに由る）周辺でも同様である。灯籠は水面上二米程の高さがあり、中秋節（八月十五日）には灯が入れられて月見客で賑うという。

周囲約一五粍、面積にすれば五、六〇〇平方米程の西湖周辺には、いわゆる近江十景の元となつた、有名な西湖十景がある。また、それ以上に名高いのは、白居易、蘇東坡という二人の詩人がこの地へ官吏として赴任し、西湖を濬築して白堤、蘇堤を築き、治水に功を立てたことである。俗に「天に天堂あり、地に蘇杭あ

り」といわれるが、杭州は風光明媚な西湖をもつて内外にその名を知られている。

白居易は長慶二年（八二二）から二年間杭州刺吏の任に在り、「余杭形勝」「春題湖上」「西湖留別」などの作品を残した。そして、蘇東坡は熙寧四年（一〇七一）から二年間杭州通判として、また、元祐四年（一〇八九）から二年間知杭州として、二度この地に赴任した。奇しくも二人の詩人が約二五〇年を隔てて西湖畔に立ち、同じく堤を築くのである。

三潭印月からは、南岸の南屏山森影に淨慈寺が遠望できる。船にて蘇堤南端に上がり「花港觀魚」の篇額（公園内にはこの文字を刻んだ碑もある）を見て、花港公園へ行く。宋代には既にこの地に園林が在り、水を引いて珍らしい鑑賞魚が飼われていたらしい。

#### 9・30 花港公園出発。六和塔へ向かう。

杭富公路を経て、錢塘江大鉄橋西側（錢塘江北岸）に位置する六和塔を目指す。この道の西側には有名な虎跑泉が在る。約二〇分で六和塔に到着。この八角一三層（内部七層）、高さ約六〇米の塔（外側は木造、内部は甃、檐の関係で一三層に見える）は、錢塘江（浙江）の浙江潮と称される海嘯を鎮める目的で、北宋開宝二年（九七〇）に智覚が建てたと伝えられる。本来は月輪山（塔の後方の山）の開化寺内に在ったといわれるが、現在では清代光緒二六年（一九〇〇）に修復されたこの塔のみ残る。

六和の名称の由来は、六和敬（六和合、身・口・意・戒・見・施）にあるとされる。

余談になるが、この塔は『水滸伝』の中で、花和尚魯智深、林沖、武松などの好漢終焉の地としても登場する。

10・20 六和塔出発。西冷印社へ向かう。  
環湖西路を北にとり、西北岸の環湖北路へ入り、杭州飯店、西冷賓館前を通過して右折、西冷橋を渡り、孤山島に入つて西冷印社へ向かう。約一五分で到着。

ここは、著名な篆刻家であり、画家でもあつた吳昌碩（一八四四～一九二七）が、中国における伝統的な金石篆刻芸術を研究するため、一九一三年に結成した学術団体（結社）の本拠地である。年二回会合して金石書画の展覧会が開かれ、日本からも篆刻家が参加することもあるという。

#### 5・30 分程参観して、宿舎へ戻る。

#### 11・45 宿舎にて昼食。

二時間程自由行動となつたので、団長の許可を受けて鈴木哲雄氏が立てられた計画に便乗させて頂き、神戸信寅氏と共に五雲山雲棲寺を参観に行く（団とは別行動になるので詳細をここには記さない）。

#### 14・15 宿舎出発。靈隱寺へ向かう。

環湖北路から靈隱路へ入る。靈隱寺は西湖の西、北高峰の麗に位置する臨済宗の古刹である。約二〇分で到着。先ず飛来峰を参

訪中団日記（佐藤）

観する。靈隱寺開基の慧理が、靈鷲山の一峰に似ていることからその名を付したと伝えられる。入口近くに理公之塔が建ち、海拔三〇二米の山には、七二の洞窟が掘られ、その中には数多くの彫刻（五代の頃と推定される貴重なものも在る）が施されている。また、山肌にも大小様々（その数三〇〇余という）な仏が刻まれ、陀羅尼が悉雲で大きく *Om mani pa dñma hūm*（帰命 摩尼宝珠・蓮華・大誓願）と刻まれているのが見える。

少し登り勾配のついた参道を進むと、右手に如意斎、続いて天王殿が現れ、「雲林禪寺」「靈鷲飛來」の大きな篇額が掲げられている。その裏手の大雄宝殿には、高さ一九・六米の雄大な釈迦座像を安置する。伽藍は比較的新しく、整備は行届いている。天王殿前の石塔二基は、宋代初に建立されたもので、浮彫が美しい。この寺は文革時には故周恩来首相の指示で保護され、破壊を免れたという。線香を供え、礼拝する参詣者の様子を観光客が珍しそうに眺めている。線香の代金は寺の重要な財源となつていいようだ。大雄宝殿を出て天王殿の西を回り、羅漢堂横を抜けて参道へ戻る。ここには、浙江省佛教協会、杭州市佛教協会が置かれている。南山の淨慈寺に対する北山の靈隱寺といわれ、南宋代には五山の第二位に列せられた格式を持つ。

15・30 精隱路を北へ戻り、植物園の奥へ入った所に玉泉寺がある。約一〇分で到着。三大名泉の一である。伽藍は全く残っておらず、

寺址は現在、公園となつてある。魚樂園と称される休憩所で、草魚を観ながら小休止。

16・20 玉泉寺出発。

曙光路を経て体育場路に入り。浙江省工芸美術服務部（この建物は現在修理中で、外側には足場が組まれ雑然としている）と、杭州友誼商店に立寄って宿舎へ戻る。

三〇分休憩の後、夕食のため外出。今晚の食事は当地の名物料理である。孤山島を経て白堤を進むのであるが、夕暮の西湖は暫し見とれる程の美しさを漂わせていく。夕涼みの人出は多く、漫步きの人、街灯下にて読書する人、夫々に夏の夕暮に涼を求めて湖畔に集まっている。色取り取りの電球が柳の並木に掛けられているのには少々興を殺がれるが、その程度では色褪せない美しさを西湖は持つてゐる。

断橋を渡り、二〇分程で群英路に面した「知見觀」という食堂に着く。様々な調理した湖の幸と、蓮の葉を用いた特殊な鳥の蒸焼きなどに舌鼓を打つ。

20・30 知見觀出發。宿舎に戻る。

この時間になつても漫歩く人は多い。ところが、バスはポジションライトも灯けずに走る。点灯しない理由は、歩行者などが眩しいからだという。しかし、歩行者にしてみれば、暗闇みから突然車が現れるのは非常に怖いことだと思うのだが。

七月三一日（金）晴 杭州——蘇州

6..50 起床。三〇分後に朝食。

着する。

8..00 宿舎出発。

出発に際し、寧波支社の奚鳳仙女史と別れる。

昨日に続き、西湖周辺の平湖秋月、柳浪聞鶯、聚景園などを経た後、杭州駅から列車にて蘇州へ向かう予定である。

先ず、孤山公園東端の平湖秋月に赴く。白堤で区切られた西湖の北(外西湖)は、蓮が一面に生い茂り、大きな緑の水面の如き葉のここかしこに薄赤色の花が開いている。また、対岸の丘上には保俶塔が遠望できる。二〇分程勝景を楽しみ、次に、白堤を渡つて湖浜路から環湖南路を経て西湖東岸の柳浪聞鶯を訪れる。よく整備された公園である。この時間には既に胡弓の練習をする人などが園内にいて、休憩所は一杯である。そここに獅子の形をした果壳箱(ごみ箱、果は果実、壳は殻)が備えられ、大きくな開けている。ドロリとした餡色の釉薬がかけられ、単純素朴な形で、何の街もなく周囲の景色に溶け込んでいる。ちなみに、この獅子形果壳箱の産地は宜興で、これから訪れる予定の蘇州とは太湖を挟んで西側に位置し、日用陶器を多く産している。

日中不再戦の碑を過ぎ、湖畔を歩いて聚景園に着く。絵画、墨跡(作者は現代の人が大部分という)などが回廊に展示され、庭には盆栽も置かれ、屋外の画廊といった雰囲気である。

9..50 聚景園出発。杭州駅へ向かう。  
勤儉路を経て杭州市内を西から東に横断し、約一五分で駅に到

16..10 蘇州駅到着。  
蘇州駅は現在、大規模な駅舎を新築中である。ここで、蘇州支部の孫来慶氏が随行員として加わる。  
用意されたバスにて獅子林へ向かう。市の北西に位置する蘇州駅から、旧城内へ平門より入る。北寺塔を左手に見て北寺塔路を東進する。歴史的みて、この街が最も栄えたのは隋・唐代であるといえるから、道路に敷かれた石畳の中には千年を越す時を経て来た石も存在するかもしれない。道の両側にはプラタナス、アカシアなどの並木が続き、それが家々の白い石灰に良く似合っている。街全体は杭州と似た雰囲気を持っており、俗に「この世の天国、蘇杭」と称される。そして、この地は西施を筆頭として多くの美女を産んでいる。獅子林へ向かう間、蘇州の街について孫氏は次のように説明した。

訪中団日記（佐藤）

この地は、春秋時代に吳王闔閭が都として以来、中国で最も美しい街の一つとされ、杭州と並ぶ江南の景勝地である。地理上の位置としては、上海の西約六五粧、太湖東岸に近い。旧城内には名園が多く残り、風光明媚で気候も温暖である。そのため、官僚、文人の多くが晩年をこの地で過し、多くの園林を残した。また、太湖・澄湖をはじめとする幾多の湖は運河で結ばれ、旧城の内外は運河で隔てられている。

隋代に蘇州の名が付けられ、ベニスと並ぶ東洋の水の都である」と。

説明にあつた水路は、大運河（北から永濟渠、通濟渠、山陽渠、江南江の四部分により構成される）とともに物資の重要な流通路である。それは、蘇州が経済的に、また文化的に高い水準を誇る源となつていて、大運河は隋の煬帝により造られたが、この建設のため國が傾き、隋は短命であつたとさえいわれる。その大水路は、過去においては、煬帝の欲求を満すことに始まり、その後、東南地方の苛酷な租税を都へ運ぶ水路ともなつた。しかし、建設以後、中國に大きな利益を齎してきたことも事実である。

蘇州滞在中に、獅子林、拙政園、留園を參觀し、園林の一端を垣間見たが、いずれも、水に浸触されて奇怪な形となつた太湖石（太湖から産出するのでこの名がある）を多く用いた庭園であり、日本の庭園とは些が趣きを異にしていた。

園林造築に際しては、奇怪な形の石を好んで選び用いたというが、その様は見る者を感覚的に圧迫して、暑さを倍にも感じさせ

ている。園林全体の造作に意識の休まる空間といったものが乏しく、肌にまとわり付く感じで辟易とした、というのが偽らざる印象である。

日本においては、枯山水にそれらの影響が僅かに見られる程度で、その他にこのような一種異様な雰囲気を漂わせるものはない。

また、園林内の建物の軒は、伽藍の屋根と同様に大きく勾配が付けられて反り返つており、日本における上流階級の遊び場として代表的な桂離宮にさえ、そのような裝飾的技術誇示の影響は見られない。

中国より文化を移入した歴史を有する日本は（美的感覚は、個人、民族により大きく異なるのは当然であるが）、幸いにも何處へあの脂氣を忘れて来たようである。

結局、これら庭園には、過去の中国における縉紳の美的感覚が残されているのみで、精神的洗練は感じられなかつた。しかし、それらに美を見出せないとしても落胆することはあるまい。中国には日本人が驚倒するような美が他にいくらも在るのだから。

17・10 獅子林到着。

旧城内北東にこの園林は位置し、東の婁門からの道と、北の齊門からの道が交差する辺りに、北寺塔路を挟む形で拙政園と向かい合つてゐる。

園内の太湖石総てを獅子に似せたことにより、この名称があ

る。また一説には、獅子は師資（中峰と天如を指す）に通じるともいう。本来は菩提正宗寺の一部に造営された庭園であったことから、園林としての規模は比較的狭い。その狭さを、石の巧妙な配置により廻廊を様々に作り出して補っている。

17・10 獅子林出発。蘇州飯店へ向かう。

街角には生活用水の確保のため、そこここに井戸が掘られている。地下水脈は地表に極めて近い所を流れている模様で、地表から井戸水面までは僅か二米程である。

臨頓路を南下し、鳳凰路から友誼路を経て網師園近くの蘇州飯店へ向かう。この宿舎は、旧城内南東隅に位置し、友誼路を東へ少し行けばすぐに葑門である。一五分程で到着。ここには国際旅行社蘇州支部が置かれている。

夕食迄には少し時間があるので付近を散歩。飯店に帰つて最上階のコーヒーショップから蘇州の夕景を楽しむ。葑門を出た東の独墅湖方面、及び南の運河両岸地域には、遠くに工場、近くに高層アパート群を見ることができ、市周辺の都市化が進んでいることを窺わせる。しかし、緑は極めて多く残されており、その計画は秩序ある状態で進められているようだ。

ところで、紀元前五世紀頃蘇州を都とした吳は、越と死闘を演じ遂に滅ぶ。「姑蘇台上烏棲時、吳王宮裏醉西施」と季太白の「烏棲曲」に記されているように、滅亡の原因の一つは、越王勾践から贈られた絶世の美女西施にあつたともいわれる。

現代の蘇州は、人口約五〇万の工業都市で、鉄鋼、造船などの重工業のほか、白檀の扇子などの伝統工芸が有名である。

18・30 夕食。  
八月一日(土) 晴 蘇州——上海

7・00 起床。三〇分後に朝食。  
8・30 宿舎出発。

友誼路から市内の中心を南北に走る人民路に入り、閨門から城外へ出る。そのまま楓橋路を直進すれば寒山寺へ行くが、その手前で上塘河と称される運河を渡り、留園へ向かう。ちなみに、上塘河は寒山寺の北で楓江と交わっている。

8・50 留園到着。

この園林は中国四大庭園（留園の他は、北京の頤和園、蘇州の拙政園、河北省承德市の避暑山莊）の一つに数えられ、明代天順年間の造築という。当時は東・西両園が存在したというが、清代嘉慶年間に東園跡に寒碧山荘が建てられ、光緒年間に留園と称されるようになった。

庭園の中央には池が在り、それを囲む形で涵碧山房、遠翠閣などの建物が配されている。また、東側の隅にも小池が在り、その中には冠雲峰と名付けられた太湖石の奇怪な巨岩が立つ。それに対し、西側は築山の回りに清流をめぐらせて、東側とは対象的な構成となっている。

この園林の特徴は、歴代名筆家の書を石に刻み、長廊の壁に嵌

め込んで展示していることと共に、小橋、透し窓、竜牆などを連係させて、高低、曲直、明暗といった造園芸術における対比の手法を駆使して造られてることにある。歩を進める度に異った景色を楽しむことのできる回廊式庭園の代表的存在といえよう。

三〇分程度で出発し、虎丘へ向かう。留園路から虎丘路に入り、西園前を暫く北上すれば京滬線と交差する。更に、山東河と称される運河を過ぎると虎丘である。

#### 9・35 虎丘到着。

旧くは虎丘山雲巖寺と称し、呉王闔閭の墓と伝えられ、蘇州城外北西に位置している。京滬線を上海方面から蘇州駅に近付くと、右手前方に僅かに傾斜した塔を見る事ができるが、それが旧雲巖寺塔である。

#### 虎丘の名は、闔閭の葬儀に際して、墓上に一匹の白虎が現わ

れ、墓を守るが如く座したことに由来する、と『史記』は伝える（『越絕書』卷之八には、葬儀より三日後、と記す）。また、海拔三六米の低い丘が、虎の形に似ていることからともいう。丘上の寺塔は、五代末より北宋初（一説には九五九年着工、九六一年完成という）にかけて完成した、八角七層の甕塔で、高さは四七・五米あり、明代の地盤沈下により現在では約一五度傾斜している。

海涌橋を渡り、元代に建立された断梁殿（二山門）を潜り坂道を登ると、左手に敢々という僧侶の開いた敢々泉、右手に呉王が

試切りをしたという試劍石など、伝説に彩られた遺跡がある。更に登れば、前が開けて千人石、剣池が現われる。

千人石の名称は、東晉より劉宋にかけての高僧竺道生が説法したことによる説と、闔閭の墓の工事人夫千人を生き埋めにした説、また、闔閭への殉死者千人が埋められた説などがあるという。

竺道生の説法を聞いて、石が傾いたとされる点頭石が白蓮池の中に入り、また、池の傍には「生公講台」の大篆書も見える。

竺道生の虎丘滞在については、『梁高僧伝』に「初投吳之虎丘山、旬日之中學徒数百。其年夏雷震、青園仏殿、龍昇于天、光影西壁。因改寺名号曰龍光。時人歎曰、龍已去生處行矣。俄而投迹盧山」（『大正藏』五〇卷、三六六c～三六七a）と記される時のことであろう。

秦の始皇帝が三千本の宝剣を捜すために掘った跡、という剣池は千人石の後方に在り、「虎丘劍池」の大きな文字が刻まれている。雲巖寺はその後の丘上に在ったというが、今は大雄宝殿を残すのみである。

蘇東坡は「到蘇州而不游虎丘、乃是憾事」と記したが、現在でも公園となつたこの地に多くの観光客が訪れている。致爽閣にて小休止。

宗門との関連では、雲巖寺歴住中に如淨禪師門下石林秀の名が見えることを記しておく必要があろう。

10：25 虎丘出発。寒山寺へ向かう。

虎丘路を戻り、楓橋路に出て西進すると寒山寺である。約一〇分で到着。

寒山寺は旧称を妙利普明院、もしくは楓橋寺といい、梁代天監年間の創建と伝えられる。現寺名の由来は周知の如くである。元・明・清代に興廢を繰り返したと伝えられる。現在の伽藍は規模も極めて小さく、少々落胆。

唐の詩人張繼の七言絶句「楓橋夜泊」は、日本において最も親しまれた唐詩の一つである。

月落烏啼霜滿天  
江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

牆壁を抜けて、「古寒山寺」の扁額が掲げられた山門を潜れば、正面に大雄宝殿、その奥に藏經閣、その右手に鐘楼、また、山門右側には寒山・拾得の塑像を安置する小院、その更に右奥に碑廊、五百羅漢陳列室と続き、碑廊裏手（山門側）に楓江樓が在る。藏經閣の左手前方の方亭では通如師（七八歳）がにこやかに迎えてくれた。

藏經閣下には、宋代の張樗寮による『金剛經』の石刻が在る。また、近舟筆の寒山・拾得図は、塑像の立つ裏側の壁に嵌込まれ、硝子で保護されているが、愈樾筆の楓橋夜泊詩は、むき出しのまま碑廊に置かれている。

鐘楼と小院を結ぶ渡廊下には、岳飛、文征明、唐寅、愈樾など

の詩文を刻んだ石板が壁に嵌まれている。

張繼の詩に残る楓橋（古くは封橋と称す）は寺の前を流れる楓江に架かる太鼓橋であるといわれる。しかし、寺の前に架かる太鼓橋は江村橋であり、その南二〇米程の所に架かる楓鎮橋と銘板に記された石橋は太鼓橋ではなく、また、その名にも少々不自然な印象を受ける。

楓橋はもう少し北に在ると思うが、現実に確認したわけではない。府城の西七里（『大明一統志』卷之八）といわれるから、この辺りには違いないが、楓橋が楓江を渡る辺りであろうか。

11：15 寒山寺出発。宿舎へ戻る。

宿舎到着後、昼食を済ませ、暫く自由時間となる。

14：00 宿舎出発。

昨日、獅子林より宿舎へと進んだ道を、今日は逆に辿って拙政園へ向かう。約一五分で拙政園に到着。

蘇州最大の園林であるが、その歴史は比較的浅く、明代正徳から嘉靖にかけて、御史王獻臣が造築し、その名称を晋代潘岳の『閑居賦』の「灌園鬻蔬、是亦拙者之政也」から得たといわれる。大官とはいえ、かくも広大な庭園を造ることができる過去の中中国における官僚制度は、科挙に合格すると同時に、榮達の道が一挙に開け、権力を得るのみならず一代で巨額の富を成すことが可能であったという証しといえよう。

その後、この園林の持主は屢々変わり、明末には、かの吳三桂

訪中団日記（佐藤）

が所有したこともあるという。

園は東・中・西園により構成され、この三部分は壁によつて巧みに仕切られ、出入口は東園に設けられている。総面積の半分強が池となっている水の庭園だが、楼閣の配置とよく調和が取れていて、見る者を飽きさせない。

東園は一瞥したのみで、直ぐに中園に入る。四角の窓を持つ遠香堂、また、南軒、香州、小滄浪など、水面に映る月を見て楽しむ場所が多い。西園に入り、笠を象った笠亭を過ぎて、留所閣で小休止となる。

15：20拙政園出発。

これより蘇州駅へ向かい、列車にて上海へ戻る予定である。途中、北寺塔にて少し時間を割き、参觀する。

八角九層、煉瓦と木で造られ、七六米の高さがある。内部の階段は昇降可能で、展望台として使用されている。梁代の創建といわれ、南宋紹興末に再建され、以後、明・清・解放後と手が加えられているという、蘇州觀光の名所である。北寺塔出発後、約一五分で駅に到着。

17：20 上海駅到着。

国際飯店にて夕食のため、西藏路を南に下る。退社時間なのであろう、杭州や蘇州とはまた違つた霧廻氣の雜踏を搔き分け、約一〇分で到着する。

19：00 国際飯店出発。衡山賓館へ向かう。

この宿舎は、市の南西に位置しており、南京路から衡山路へ入つて約一五分で到着した。中国における最後の夜ということで、一階のコーヒーショップにて解団式を行う。

20：30 解散。

八月二日（日）晴 上海——大阪

6：30 起床。三〇分後に朝食。

8：30 市内見学に出発。

衡山路から右折して復興路に入り、西藏路を経て、南京路に面した上海工芸美術服務部へ向かう。二〇分程で到着。ここには各地の名産品が一堂に展示されており、また骨董品も多く置かれていて、その規模は大きい部類に入る。

9：30 工芸美術服務部出発。

次に、上海友誼商店へ向かう。

南京路から中山路を経て、吳淞江が黃浦江に注ぐ地点にほど近い友誼商店へ向かう。真近に吳淞江に架かる外泊渡橋（旧ガレデンブリッジ）が見える。旧称から想像する様な浪漫的霧廻氣はなく、只の鉄橋で少々失望。一五分程で商店に到着する。

三〇分後、友誼商店を出発し、一度宿舎に戻る。暫く休憩の後、各班にて記念写真を撮影し、五〇分後に衡山賓館を出発する。

11：40 上海華僑飯店到着。

この飯店も南京路に面しており、昨日夕食を取った国際飯店は、東へ数分の所に在る。中国での最後の食事となる昼食を取り、一時間後に出発する。

13：00 上海虹桥空港到着。

八日間の全行程に随行し、お世話を下さった陳杏奎氏に別れを告げ、出国手続きを済ませて、出発時間まで待機する。

13：40 JAL 794 便、上海発大阪経由成田行きに搭乗。

三〇分後に離陸。往路と同様に雲は少なく、眼下に長江デルタ地帯を眺めつつ中国を離れる。

17：30（日本時間） 大阪空港到着。

団長竹田学長以下三二名、全員無事に帰国。通関手続き終了後、自由解散。

訪中団のお世話ををして下さった方々。

中国国際旅行社 杭州分社

陳杏奎氏 （全行程）

上海分社

章惠菁女史

寧波支社

陳炳良氏 奚鳳仙女史

蘇州支社

孫来慶氏

訪中団日記（佐藤）

最後に、訪中団に団員として参加された鈴木哲雄氏は、出發に際し『訪中のしおり』と題した冊子を作製して全員に配布されたことを特に記しておく。その内容は、訪問地域別に分類した寺院・旧跡の詳細な解説であり、この『しおり』により今回の研修はより一層有意義なものとなつたのである。